

野津原地方の庚申信仰

岡部 富久市

一 庚申信仰について

庚申信仰とは「六十年あるいは六十日ごとにくる庚申の時に、特殊な禁忌を要求する信仰」⁽¹⁾である。

そして、この「特殊な禁忌」というのは、人体に住む三尸という虫⁽²⁾（上尸彭琨、中尸彭質、下尸彭矯）が、庚申の夜に人が眠ってしまうと、その間に天にのぼって天帝に日常の悪事を報告し、人の命を短くするので、それができないようにするため、人々が庚申の夜に徹夜謹慎して息災を祈ることをいう。

こころみに、いま手もとにある倭漢三才図絵庚申をみると次のように出ている。

曰く「影者三屍之姓也 常在人身中 伺察其所為罪 每庚申日告上帝 故此夜不寝而守三屍」。

以上のことから明らかのように、庚申信仰の中核をなすものは、庚申の夜、徹夜して身を慎しみ息災を祈る、という行事であって、本来は特定の信仰対象をもつものではなかった。

しかし、この信仰が民間に伝播されていく過程で、仏教側では青面金剛が、神道側では猿田彦が、それぞれ礼拝対象としてとり入れられ、次第に確立されてきたのである。

いま、路傍にみる青面金剛の石像や猿田彦の石塔、さらに庚申待の夜、床の間に掛けられる猿田彦の画像などは、もともと庚申信仰とは無関係なものであった、と言える。

なお、この庚申信仰の由来をめぐっては、これを我国固有の信仰である、とする柳田国男氏を中心とする日本民俗学者の主

張と、それに反対し、中国の道教にその源流をもつとする竈徳忠氏らの説とがあつて、いまだに結着をみていない。

註(1)

柳田国男監修 民俗学辞典 一九六頁「庚申」

註(2)

三戸の虫は、人の頭、腸、足に住み、およそ 次のような性格をもつとされる。即ち、上戸彭堀は人の頭に住み、黒色をしており、眼を悪くし、髪を白くする。中戸彭質は人の腸に住み、青色をして、悪夢を見させ、飲食を好み、人の五臓を損う。

下戸彭矯は、人の足に住み、命を奪い、精をなやます。

二 野津原地方における庚申信仰の現状

現在、野津原地方のかなりの地区において、庚申信仰はつつましやかに行なわれてはいるが、すでにやめてしまったところが多数ある。

また、残っているものの中でも、庚申の夜、徹夜して精進謹慎する、というこの信仰の本質面を伝えている例は一件もない。ただ、「曰待、庚申は後家の晩」ということばとともに、かつては徹夜したことを記憶している人もいることから、明治の初め頃までは、男だけが集まり、徹夜して、閉鎖的、同志的緊張の中で庚申待をしていたことが知られるのみである。

庚申待の日も厳格に庚申の日を守っているところは少なく、ほとんど一定していない。
又、参加資格も戸主のみというのはきわめて少ない。

当夜は、座元にあたった家の床の間に猿田彦の文字、あるいは画像の掛軸をかけ、各自手持ちの酒肴を用意し、夕食をともにして歓談に時を過すくらいで、きわめて開放的、娯楽的なものとなっている。

又、庚申の神は、作の神、病魔災厄除けの神、家内繁栄の神、死を喜ぶ神、女嫌いの神としてまつられている。(1)

かつては、宗教的行事の名のもとに、敵しい農作業からの解放の喜びを味わい、作の神、災厄除けの神、女嫌いの神として庚申の神をまつり、女を遠ざけ、村の豊作を祈るとともに、農民自らの生活連帯のきずなを確かめあう重要な場所となつたであらう庚申待も、いまや、その面影はない。

註(1)

例一 野津原町恵良儀丁場

一家他十四戸

庚申の夜、午後八時頃から午後十時頃まで。猿田彦の掛軸を用いるが特別な儀式はない。構成戸数は十五戸（十五名）。出席資格、男女いずれも可（成年）。清酒一升用意し夕食をともにし歓談する。あと頼母子。庚申の神は家内繁栄、病魔災厄除けの神としてまつる。

例二 野津原町本福宗

一家他七戸

年に一度、座元の都合のよい日、夕刻から（徹夜はしない）。庚申猿田毘古神
祝奉萬豊作穂稔祈の掛軸を用いるが特別な儀式はない。各家それぞれ清酒一升を持参し、夕食をともにして歓談する。構成戸数八戸（八名）。出席資格、男女いずれも可（成年）。庚申の神は、作の神、家内繁栄の神、病魔災厄除けの神としてまつる。

例三 野津原町本町 土橋組

〒家他十九戸

庚申の日、夕刻から（徹夜はしない）。各家輪番で座前となり、米を各自持参して夕食をとともにして飲談する。猿田彦神の掛軸を用いるが特別な儀式はない。出席資格は戸主のみ（女子の出席は許さない）。

庚申待が終ると、座前が猿田彦神の掛軸を保管。次の庚申待の時に、座前となった家が夕刻それを受取りにゆく。
泊^{とまり}庚申（掛軸を持って越年すること）にあたった家は運がよい、という。

三 野津原地方における庚申信仰の盛衰

我國における庚申信仰はすでに平安時代には始っていた、と考えられている。

そして、それが各時代を経ながら次第に浸透し、江戸時代に至って全国的に盛行をきわめたものである。

では、そのような全国的な流れの中で、野津原地方の場合どのような受容と発展がなされたのであろうか。

まず、庚申信仰がおこなわれ出した時期については、それをうかがい知る材料となるものはほとんどない。

ただ、調査結果からみた場合、最も古い塔が、本福宗にある宝暦九年（一七五九）のものであることと、その刻銘が「奉待青面金剛塔」とあることから、すでにその頃には「待」がつくられて、待人による庚申供養が行なわれていたことが知られる。また、本福宗の塔より十一年後の明和七年（一七七〇）の刻銘をもつ青面金剛像が野津原町恵良日方¹⁾の西福寺境内にあることなどを考えあわせると、地理的な広がりからみて、この時期以前にも、この地方においてかなりの信仰の高まりがあったものと推測される。

次に野津原地方の庚申信仰について、いかなるものが指導的役割を果たしたか、については天台宗天徳寺²⁾の流れをくむ前記西

福寺関係者によって、現に地元日方目で庚申待の供養がなされている事実があることなどからして、あるいはそういった天台宗の僧侶によって指導されていたのではなからうか、と考えられる⁽³⁾

もし、そうだとすると、野津原地方の庚申信仰の歴史はかなり古い時代までさかのぼることも可能となるのではなからうか。ついでながら、野津原町と隣接する大野郡朝地町に天正六年（一五七八）造立の我国でも比較的古い庚申塔があることは極めて興味深く思われる⁽⁴⁾。

ところで、宝暦九年以下の、判明している塔について、これを造立された年代別に示すと別表1、別表2のようになる。

これによると、古くは宝暦九年（一七五九）のものから、新しいものは昭和三十三年（一九五八）のものに至るまで、約二〇〇年間にわたって分布している。

この間、庚申信仰の盛衰の波は大体において、安永期と文化文政期の二度にピークを示し、次第におとろえながら現在に至っていることがわかる。

もっとも、造塔の数の多寡をもって信仰の情熱の高低を判断するにはあまりにも資料が乏しすぎるが、少なくとも安永期のこの地方に関するかぎり、上の推察はそう的をはずれていることはなからうと思う。

というのは、この期に造立されたものが、数のうえからはもとより、その規模や技術の点において、きわめて威風堂々としており他のものをはるかにしのいでいるからである。

（写真5参照）

さらに、その分布が、権現、入蔵、矢の原、石合と、ほぼ野津原を縦におおっていることからもうい得ることであり、江戸時代中期のこの時期がこの地方での庚申信仰に一つの特色ある時期を与えていることは間違いないようである。

安永期以降のものについては、数が減少しており、造塔の手法も形式化され儀軌は乱れて、信仰が下火になってきたことを感じさせる。

とはいえ、一九〇〇年代の昭和期に三基もの庚申塔の造立をみていることは特筆さるべきであり、この地方での庚申信仰が依然として根強い影響力をもっていることを物語っている。

なお、上にみた信仰の盛衰と、この地方の歴史とが、いかなる関連をもっているかの考察は重要であるが、残念ながら、今のところそれを判断する材料をもたない。

ただ、野津原地方において庚申信仰が最も盛んであったと考えられる安永期は、日本史的にみると、幕政上の破綻が顕著になり、農村では農民の一揆が頻発化してくる時期であることに留意すべきであろう。

(1)

天治二年の創建で、もともと天台宗であったが現在は曹洞宗になっている。大分郡野津原町恵良日方目にある。

(2)

長和五年に創建され、大分郡野津原町権現ヶ鶴にあったといわれるが現存しない。

(3)

大分郡野津原町船平の喜久田傳氏は、西福寺住職斎藤孝秀師のはからいによって昭和三十三年四月、家人の病氣平癒のために庚申塔を造立されている。(写真4参照)。

(4)

平野実著「庚申信仰」四十頁。

別表1 年号別造塔状況

種 造立 年代	類 青面金剛像	猿田彦神 (文字陰刻)	塔申塔 (文字陰刻)	奉待青面金 剛塔 (文字陰刻)	基 数
宝曆				1	1
明和	1				1
安永	5				5
天明	1				1
文化	2				2
文政	1		1		2
弘化	1				1
昭和	1	1	1		3
	12	1	2	1	16

別表2 年代別造塔状況

種 造立 年代	類 青面金剛像	猿田彦神 (文字陰刻)	庚申塔 (文字陰刻)	奉待青面金 剛塔 (文字陰刻)	基 数
1600					
1700	7			1	8
1800	4		1		5
1900	1	1	1		3
	12	1	2	1	16

野津原地方の庚申塔の形態



自然石型(写真1)

野津原町本福宗にありこの地方で最も古いもので宝暦九年(1759)の刻銘がある。



駒型(写真2)

野津原町山峰にありこの地方では数少ない型である。文政四年(1821)の刻銘がある。

別表3にみるように、そのほとんどが板状船型の青面金剛像であり、他は、上部に種子をもち、その下に庚申塔と陰刻された駒型のもと笠付角柱型のものでそれぞれ一基と、猿田彦大神、猿田彦神、奉待青面金剛塔と陰刻された自然石型のもので、それぞれ一基である。

(1) 形態と主尊

四 野津原地方における 庚申塔の形態的特徴

(2) 大きさ
 台座から先端までの高さが一メートル三十センチの大きさなもの(写真5参照)から、小さいものは四十一センチのものまである。



最も大きな青面金剛像(写真5)
 野津原町入蔵塚にあり、
 威風堂々としており最盛期
 のものと思われる。
 安永三年(1774)の刻銘が
 ある。



笠付角柱型(写真4)

野津原町船平にあり野津原地方では
 最も新しいもの。
 家人の病氣平癒を祈願して造立され
 たものである。
 昭和三十三年(1957)造立。



板状船型(写真3)

野津原地方で最も多くみられる型で
 ある。これは野津原町石合にあるも
 ので弘化四年(1847)の刻銘がある。

(形態は概ね平野実氏の分類法による)

(3) 刻銘

塔上部 種子

塔中部 庚申塔

猿田彦大神

猿田彦神

奉待青面金剛塔 など陰刻

塔下部 願主

願主中

願主中敬白

庚申待願主中

村中

氏子一同 など陰刻

なお、塔下部の刻銘については、右のもの以外に待人の名前を刻んであるものがある。待人は少ないもので九名、多いものは十三名まであり、中には苗字を冠したものもある。このことから、当時の農民の中には私的に苗字を使用していたものがあつたことが知られるとともに、彼等がリーダーとしての役割を果たしていたものと考えられる。

(4) 青面金剛像の付帯物

天邪鬼

童子

日輪

月輪

瑞雲

鶏

猿

富士山

青面金剛像の付帯物の組合せは多彩である。中でも、猿と鶏は庚申塔を特色づける重要なものとされるが、野津原地方においても例外でないことがわかる（別表4参照）。

即ち、調査した青面金剛像三十体のうち、二十六体には何らかの付帯物があり、その中で猿、鶏をもっているものは二十四体で、全体の九十二パーセントにあたっている。

しかし、なぜ、庚申塔に猿と鶏が付会されているのか、ということについての定説はない。

両者の位置については、そのほとんどが相対しているが、その左右はいずれもあって一定していない。

猿の態様も、三猿（写真6参照）、二猿（写真7参照）、一猿（写真8参照）のものなど変化に富んでいる。

又、三猿（言わざる、見ざる、聞かざる）や富士山？から、庚申信仰と三諦思想、及び富士信仰？の關係が推察される。



三猿と富士山?を刻んであるのがよくわかる。(写真6)

野津原町入蔵亀の上にあり安永四年(1775)の刻銘がある。



二猿(聞かざる、見ざる)と鶏がついている。(写真7)

野津原町太田にある。



猿と鳩が向きあっているもの
 (写真8)

野津原町矢の原町上にあり文
 化十五年(1818)の刻銘があ
 る。

別表3 形態と主尊

形態	主尊 青面金剛像	猿田彦(大)神 (文字陰刻)	種子と庚申塔 (文字陰刻)	奉待青面金 剛塔 (文字陰刻)
駒型			1	
自然石型		2		1
板状船型	30			
笠付角柱型			1	

別表 4

N	M	L	K	J	I	H	G	F	E	D	C	B	A	付	帯	物	整理番号(N)	数
														猿(左) 鶏(右)			(1)	6
														猿(右) 鶏(左)			(12)	2
														猿(左) 鶏(右)	天邪鬼		(4)	6
														猿(左) 鶏(右)	天邪鬼 (二匹)		(8)	2
														猿(左) 鶏(右)	天邪鬼、月輪(左)	日輪(右)	(3)	1
														猿(左) 鶏(右)	天邪鬼、童子(左右)		(5)	1
														猿(左) 鶏(右)	天邪鬼、童子(左右)	月輪(左)	(16)	1
														猿(左) 鶏(右)	天邪鬼、童子(左右)	月輪(左)	(17)	1
														猿(右) 鶏(左)	天邪鬼、童子(左右)	日輪(右)	(14)	1
														猿(右) 鶏(左)	天邪鬼、童子(左右)	月輪(左)	(15)	1
														猿(左) 鶏(右)	童子(左右)		(31)	2
														二猿(聞かざる、見ざる)	(左) 鶏(右) 童子(左右)		(10)	1
														猿(左) 鶏(右)	月輪(左)	日輪(右)	(22)	1
														猿(左) 鶏(右)	月輪(左)	日輪(右)	(23)	1
														鶏(左右) 童子(左右)	三猿(言わざる、見ざる、聞かざる)	富士山	(28)	1
														童子(左右)			(9)	1
														天邪鬼			(33)	1

五 おわりに

この庚申研究は、直接的には日本史教材の一つに供するために思いたったものですが、間接的には庚申塔の現状保存にわずかでも役立てられることを祈りつつ進めたものです。

しかし、近年の農村の急激な変化の中で、庚申信仰そのものが忘れられつつあるし、一部を除けば、すでに古老の記憶からも失せかけているのが実状です。

又、最も貴重な手がかりとなる庚申塔さえもが散逸したり、破壊されたりして資料集収が困難になっています。

以上のようなわけで、思ったように資料を集めることができなかつたうえに、勤務のあい間をみての作業であつたため、極めて不十分なままで放置されてあつたものを、とりあえず整理してみたわけです。

従って、最も興味のある庚申信仰の歴史的意義についての考察や、宇曾山修験と庚申信仰の関係などは後稿にまわすこととして、以上の論稿においては野津原地方の庚申信仰の現状と、そのあとを瞥見するにとどめました。

なお、筆者は民俗学については全くの素人ですので調査、整理の過程で大きな誤りをおかしているのではないかと懸念しています。

いろいろとご教示頂ければ幸いです。

No	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
所在地	福宗	福宗	福宗	福宗	本宗	本宗	下矢の原	矢の原町上	原村	大田	上糸	上水	上水	石詰	石合
塔名	青面金剛像	猿田彦神像	青面金剛像	青面金剛像	青面金剛像	奉待青面金剛塔	青面金剛像	青面金剛像	青面金剛像	青面金剛像	青面金剛像	青面金剛像	青面金剛像	青面金剛像	青面金剛像
造立年号	昭和十三年十月三十一日	?	文政五年正月吉日	?	宝曆九巳卯年二月初九日	安永八巳亥三月日	文化十五戊寅四月吉祥日	?	?	?	?	?	?	安永十辛丑天十一月吉祥日	?
待人他	氏子一同		村中		願主太平		願主工藤常助他八名							願主中敬白	

野津原地方庚申塔一覽表

参考文献

- 平野 実著
「庚申信仰」
角川書店
- 窪 徳忠著
「庚申信仰の研究」
日本学術振興会
- 窪 徳忠著
「庚申信仰の研究」
(年譜篇) 帝国書院
- 柳田国男監修
「民俗学辞典」
東京堂版
- 「倭漢三才図絵」